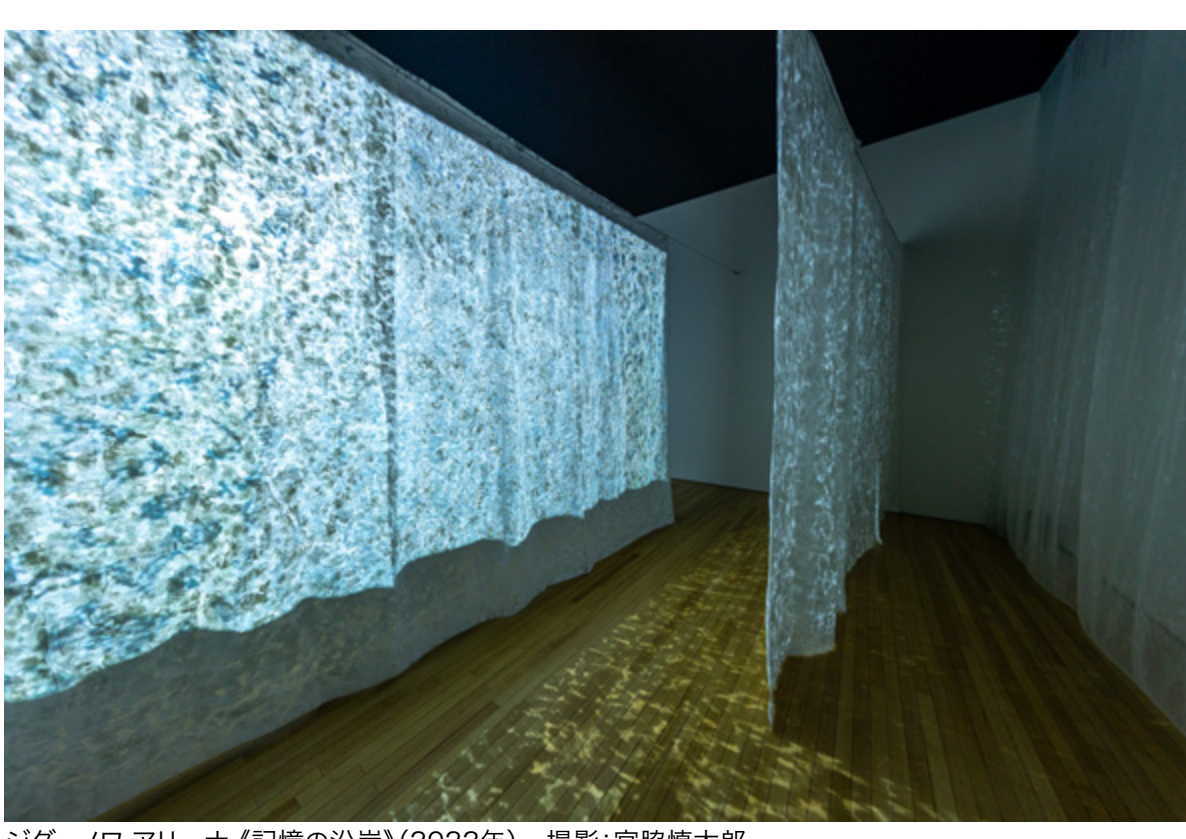


第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイ 出展作家 座談会② --テーマ「記憶/記録」

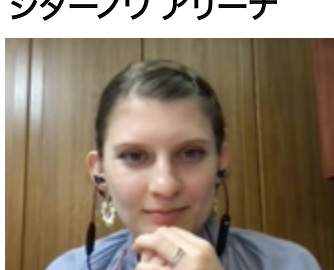


ジダーノワ アリーナ 《記憶の沿岸》(2022年) 撮影:宮脇慎太郎

第1回 MIMOCA EYE / ミモカアイでは、応募作品の中から選出された素材も技法もさまざまな作品が展示されています。この一期一会の出会いに、若い作家たちは何をどう感じたのか、オンライン座談会を開催して意見交換をしてもらいました。2回目の座談会では、「記憶/記録」についてジダーノワ アリーナさん、大東忍さん、池添俊さん、谷口典央さんの4人が話しました。

—出展作品について

ジダーノワ アリーナ

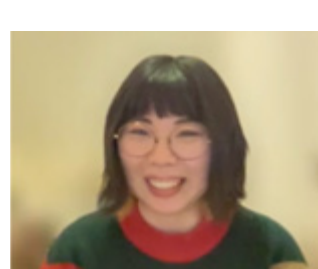


私の作品は会場の一番奥の方にある映像作品《記憶の沿岸》で、中に入っていける空間があるのが特徴です。アニメーションならではのあやふやな感じが好きで、最近は記憶や忘却をテーマにしたアニメーション作品を作っています。そもそも記憶を正確に思い出せる人はいないし、思い出した時に出てきたイメージに書き換わったり、何かがきっかけで思い出せたり、

ずっと思い出せないこともあったりということが面白いと思っています。今回の作品では、過去についてインタビューした10人の話を断片的に集めて、それぞれの人たちの言語をそのまま使ったナレーションを付けています。実は私の記憶も作品に入っています。でも自分のナレーションは、ロシア語と日本語を混ぜたようなオリジナルの「アリーナ語」で話しています。子どもの頃、ロシア語があまり喋れなかった私は、ロシア語しか話せない親とのコミュニケーションでは、聞こえた音を勝手にイメージに変換してこういことを言っているのかな、と想像しながら返事をしていました。その時の感覚は私にとって大事な記憶なので、ちょっとした遊びとして楽しみながら、隠れたこだわりとして作品に忍び込ませています。

大東忍

私は木炭画を中心に制作していて、ありふれた住宅街や祭りの跡のような、人の営みが痕跡として残っている風景を描いています。祖母が限界集落に住んでいて、その土地の風景を何らかの方法で記録したいと思ったのがきっかけのひとつでした。そんな風景に対して、ニューヨークでミュージカルを観賞したこと、日本に帰ってきて盆踊りを体験したことを接続し、踊り、そして描くという実践をしています。風景をミュージカルで祝福し、盆踊りで供養できるのではないかという思いからです。



今までは踊りに関してあまり説明的には言及してこなかったのですが、ミモカアイの展示では木炭画の配置やテキストによって、踊る意図を示しています。また、風景のジオラマを作り、小さなモニターを埋め込んで実際に私が踊っている姿も展示しました。展示全体で風景の祝福と供養と、私の身体がどうい眼差しを持って風景に立つのかを表せたらと思っています。

池添俊



私は声が残らない人たちの映画を作るために、個人の話や記憶を収集して普遍的な物語に再構成するという形で制作しています。今回出展している作品は4年ぐらい前からリサーチを始めて、精神疾患を患って現在は意識がなく入院中の家族とどうコミュニケーションをとるか、センシティブな物事に向き合いました。映像を撮ってからどうしようか、作品をどういう形で発表するのがいいのかと結構悩んだりしていました。

自分が住んでいる地域で、ある男性が亡くなる事件があり、その方は精神疾患を抱えていて家族が家の中に彼を隔離していたという事態が明らかになりました。事件がネットの記事になった時にはコメントがたくさん寄せられていました。コメントの大部分が否定的なものではなく、実は似たような境遇のご家族が結構いらして、普段精神疾患については当事者やケアをする家族も他人には言えなくなってしまっているけれども、このコメント欄には彼女・彼らの普段話せない心の内がたくさん書き込まれているのを目の当たりにしました。私自身も家族のことを隠すことはできしてしまうのですが、それではますます精神疾患が触れづらい話題になってしまう。そこで今回、声を外に出してみようと思って作品にしました。タイトルを《声を待つ》にしたのも、作品が中間地点といいますか、作品を媒介にして普段声にできないことを少しでも話せる場になればいいなという想いからです。

谷口典央

昔から過去のもの、古いものに惹かれていたのですが、それがなんでだろうと考えた時に、幼い頃は田舎の地元である祭りや行事を見たり関わる事が多くて、3歳ぐらいの時に父親に肩車されて見た追儺祭(ついなさい)の迫りに圧倒されて、その後痙攣して倒れたことがあったのを思い出しました。なんかその、圧倒された感覚はなんとなく覚えていて、怖いなあというものあるんですが、過去のものに惹かれるきっかけの一つになっています。私は無宗教なんです、そういうスピリチュアル的なものが私たちに与える力は信じていて、それが今の作品にも影響しています。



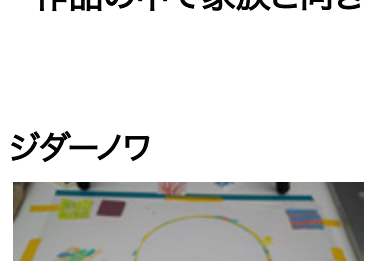
作品では場所を特定せずにどこかの土地の風景を意識して制作しています。以前は過去のことをモチーフとして絵の中に登場させていたんですが、なんでずっと過去のものばかり作っているのかな、未来でもいいかって思うようになりました。それからは今回の出展作もそうなんですが、タイムトラベラーというキャラクターを想定して、そのタイムトラベラーが見た風景みたいなものを想像して作品を制作しています。



大東忍 《夏草を燃やす》(2022年) 撮影:宮脇慎太郎

—作品の中で家族と向き合う

ジダーノワ



制作風景(ジダーノワ)

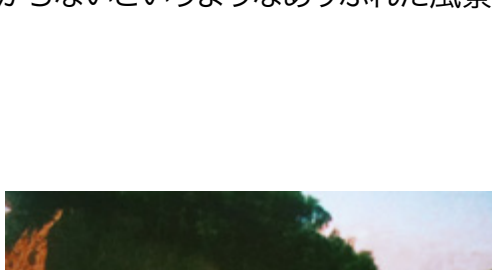
大東さんと池添さんは作品の中で家族と向き合っているじゃないですか。私も家族にインタビューして作った作品があるんですけど、出したくない、隠しておきたい、という欲みたいなものが出てきちゃうというか、家族と向き合おうって結構シンドイこともたくさんあると感じています。それをどういう風にして表現に置き換えていますか。

大東

私が風景に興味を持ったきっかけは、祖母の住んでいる地域の人口がどんどん減っていて、一番若い人が私の叔父という状況で、この村がいづれなくなると実感したことでした。その現実に向き合うのはしんどいものでしたが、これをそのまま個人的な話しておくのではなく、人間がそういう風景の当事者であることを自覚するために、このことを抽象化しないといけないんじゃないかと思いました。作品にする時は一つの方法として、人の営みが確かにある現実の風景だけど、具体的にはどこなのか分からないというようなありふれた風景を選ぶようにしています。

池添

今の時代、家族の形は多様化しているかと思うんですが、私はあまり家族という形で暮らしたことがなくて、父方の祖父母に育てられました。家族ということ考えたきっかけは、8mmフィルムの映画上映活動をしている方から「映画を作って上映会に出してくれない?」と声をかけられたことです。ちょうどその頃に知り合いの家からシングル8



《声を待つ》(部分)

のフィルムが出てきて、その使用期限が2000年だったんです。2000年は私の継母が行った年で、人生の中で人と分かり合えなかった一番昔の経験をもう一度見つめ直してみようかな、と。ただ、悲劇のヒロインみたいな形で実際にあった出来事を観客の方に向けて欲しいわけではないし、その事実を俯瞰するためにフィクションも交えて脚本に落とし込んで撮影しました。そうしたら8mmフィルムって結構思い通りに撮れないんですよ。自分の撮影技術もあるんですけど、現像から上がって割れたものを見ると想像通りに撮れているのが2割ぐらい、全然上手く撮れていないのが7割、残り1割ぐらいに自分の想像を超えた驚きがあって。否応なしに自分が想定していた作品の構成を見直す必要が出てくる。その再構成の過程で、自分の中でも客観性を持って作品を捉えることができるし、作品自身にも普遍性を持たせられるようになって感じました。

フィルムを使うということで時代性を排除できるというか、いつ撮っているか分からないというところで、見ている人の記憶と作品がつながっていけばいいなと思って作っています。

[次ページに続く →](#)